

質問のレトリックをどう教えるか — 授業「質問を作る」の試み —

池田久美子

はじめに

ある専門学校で保健師学科で、「言語コミュニケーション——論理的な文章の書き方——」という授業を担当している。全部で三日間の、かなり変則的な集中型授業である。一日目と二日目はそれぞれ二コマ続きの正味三時間、最終の三日目は三コマ続きの四時間半という具合である。しかも、この三日間はとびとびに設定されている。実習や夏休みを挟み、一カ月もの間隔が空いている。どうしても、一日ごとに独立したテーマを掲げ、その日のうちにまとまった学習を完結させるという授業スタイルを採らざるを得ない。今年の授業の構成は、次の通りである。

一 日 目……「題はコミュニケーションである」

本文と整合しない題、修辭的状况に無自覚な題の失敗事例を分析し、代案を作る。

二 日 目……「質問を作る」その1

学会における質問の方法を学ぶ。極めて限られた機会を最高度に生かす質問のレトリックを追究する。

三日目前半……「質問を作る」その2

前回の学会質問を比較的長い文章に書き直す。質問の構造を捉え、質問から論述への橋渡しを図る。

三日目後半……「意見を書く」

批判の意味と方法を学ぶ。特に批判に不可欠な引用、論証の方

法を学ぶ。

本論文では、二日目に行なった授業「質問を作る その1」を取り上げる。

I 授業展開の概要

授業の展開の全体を次に示す。

〈第1・2時〉 ※「質問を作る その1」の授業展開である。

	学 習 過 程
導 入 15 分	<p>質問の場面を設定し、その特徴を確認する。</p> <p>①T「この教室で今、看護研究発表が行なわれています。つまり、この教室は看護学会の会場です。皆さんは学会のメンバーです。研究発表に耳を傾け、これから始まる質疑応答に参加するのです。」</p> <p>②研究発表や、それに対する質問をした経験を自由に語らせる。</p> <p>③学会や研究発表会での質問の仕方の特徴を挙げる。</p> <ul style="list-style-type: none">・質問時間は極めて限られている（全体で10分程度）。・多くの人に質問の機会を公平に保証するために、一人1個の質問に限られる。再質問のチャンスはあっても1回限り。・発表を聞きながら何を質問するかを決めなければならない。発表が済むとすぐに質疑。ゆっくり考える暇は無い。・短く、無駄のない、ズバリ核心を突く言い方が必要。・相手に長々と答える余地を与えない。……
	<p>1. 資料「ユニバーサルプレコーション導入における分娩室の清浄度の検討」を配布。6人ずつ、6グループに分け、各グループそれぞれ2個の質問を作るよう指示する。</p> <p>T「これが、今日の研究発表です。学会では普通、口頭発表の形をと</p>

<p>展開 1 40 分</p>	<p>ります。今、発表が終わりました。さあ、いよいよ質疑応答に移ります。皆さんはどんな質問をしますか。たくさん質問があっても、二つに絞って下さい。とっておきの質問を試みましょう。相手の発表者にとって出来るだけ痛い質問、きつい質問を作りましょう。時間は40分とります。絞ることが出来たグループは、前の黒板にその質問をどんどん書いて下さい。」</p> <p>2. グループ単位での討議→質問の板書。</p>
<p>展開 2 120 分</p>	<p>板書された質問の検討——全体討議</p> <p>質問の成功例と失敗例を分ける条件を明らかにする。</p> <p>(授業展開の詳細はIVで後述する。)</p>
<p>まとめ 5 分</p>	<p>次回の予告。</p> <p>夏休み課題の説明。</p> <p>今日提案された質問の中から一つか二つ選び、それを原稿用紙1枚、400字に書き直す。つまり、短い質問を長い文章に書き換えてくる。授業の5日前に提出。</p>

〈第3時〉 ※「質問を作る その2」の授業展開である。

学 習 過 程	
<p>導入 5 分</p>	<p>予め提出されていた課題作文の中から、数点選び印刷したものを配布。予告通り、長く書き直した質問の文章を分析することを告げる。</p>
<p>展開 80 分</p>	<p>作文例の分析・検討——全体</p> <p>質問の構造を明らかにし、その構成要素を抽出する。</p> <p>引用——質問対象箇所を紹介</p> <p>問い——引用部分に対する質問</p> <p>引用部分の分析（なぜ誤りかの論証）——質問の説明</p>

	結論——引用部分に対する質問者の意見 代案
ま と め 5 分	本時の仕事の意味を解説する。 解説の主旨 “論文とは、問いを立て、自らそれに答えるものである。 その最も基本的な構造は、「問い—答え」から成る。 短い質問を長い文章に書き換えることは、実は論文を 書く仕事に入っていることなのだ。”

Ⅱ 場面設定

—質問の状況を仮定する—

次のセリフで授業を始めた。

「この教室で今、看護研究発表が行なわれています。つまり、この教室は看護学会の会場です。皆さんは学会のメンバーです。研究発表に耳を傾け、これから始まる質疑応答に参加するのです。」

学会での質疑応答という場면을教室に設定した。なぜこの場面を選んだのか。三つの理由による。

1. 極めて制約された条件の下であればこそ、質問を徹底してふるいにかけて出来るからである。

学会での質疑応答では、質問を準備する時間も、質問時間も、極度に短い。ただでさえ短い時間をひとり占めすることは出来ない。だから、出来る限り凝縮された、無駄を削ぎ落とした表現で、ズバリ核心を突かねばならない。この緊張感が、思考を刺激する。質問の質を問う思考が活発に行なわれることになる。

2. 対象が限定されているために、接近戦を展開することが出来るからである。

学会における質問とは、批判である。単なるお尋ねではない。発表者の主張

と質問者の主張とがぶつかりあう、論争なのである。この論争は、あくまでもたった今行なわれたばかりの口頭発表について展開される。質問者は、発表者が語った言葉そのものを引き据えて、問う。発表者が何をどう語ったか。その事実から離れた質問は、意味を成さない。抽象的な印象批評、発表者の議論の構造を無視した問いの類は排除される。一方、発表者は自分が語った言葉について責任を負う。自分が語った言葉から離れ、その外側で言い訳することは出来ないのである。

3. 質疑応答の技術を身に付け、積極的に研究討議に参加する態勢を作る必要があるからである。

研究発表、研究討議に類する経験は、学生にとって今後とも無縁ではない。職務遂行能力を高めるためには、互いに切磋琢磨する環境に身を置くことが必要である。互いに問題点を質し、意見を戦わせる技術を磨くべきである。

授業では、資料「ユニバーサルプレコーション導入における分娩室の清浄度の検討」を用いた。この資料は、この授業のために用意された架空の作品ではない。最近現実に書かれた研究論文の抜粋である。執筆者は現役の看護師グループである。この資料を配布して学生に問うた。

「これが、今日の研究発表です。今、発表が終わりました。……さあ、いよいよ質疑応答に移ります。皆さんはどんな質問をしますか。」

出来るだけ現実に近い学会の状況を作り、学生に当事者としての役割を与える。それにより、学生は自分が置かれた修辭的状况 (rhetorical situation) を具体的につかむことが出来る。①どんな相手に質問をするのか。②質問の目的は何か。③質問はどんなルールにおいてなされねばならないか。④質問者はどんな条件を満たすよう求められているのか。修辭的状况を構成するこれらの要素を意識すると、質問の方向、内容、方法が見えてくる。いわば、質問の方向、内容、方法を定める座標軸を獲得することになる。

具体的に質問を作る前に、予め学生に自分が置かれた修辭的状况の特徴を確認させる。授業で確認した特徴は次のようなものである。

①どんな相手に質問をするのか？ 「看護の専門的知識を持ち、特に産科での業務に携わる看護師である。自分の実務経験から研究の課題を掴み取り、研究の成果を業務に生かしたいと考えている。だから、研究の姿勢は極めて実践的である。抽象的、理論的な話より、すぐに活用できる実践的な話の方を好む。」

②質問の目的は何か？ 「学会の研究水準を高めるよう貢献することである。だから、単なる揚げ足取りであってはならない。発表者にとっては、自分の研究の問題点、誤りが分かり、研究の正しい進め方がはっきり見えることが大切である。そのために役立つ質問でなければならない。」

③質問はどんなルールにおいてなされねばならないか？ 「学会のメンバーは誰でも質問する権利がある。みんなに公平に質問の機会を保証しなければならない。だから、一人一問、短時間の質問を原則とする。短く、無駄のない、ズバリ核心を突く言い方が必要である。また、相手に発表内容の外側で長々と話をさせてはいけない。発表内容に即して問い、答えることも、大切なルールである。」

④質問者はどんな条件を満たすよう求められているのか？ 「看護の専門的知識、実務経験を持ち、学会の研究活動に参加、貢献する能力を持っているという条件である。言い換えれば、専門的知識も実務経験も欠いた素人ではありえないという条件である。」

「質問を作る」という授業で設定したいと思っている質問場面は、他に二つある。ディベートにおける反対尋問 (cross examination) と、議会での質問である。

ディベートの反対尋問では、一つのチームに10分程度の持ち時間が与えられている。この範囲で、メンバー同士が連携して質問を行なう。再質問、関連質問をする時間的余裕がある。さらに、反対尋問で相手の言質を取っておいて、最終弁論のための布石を敷く。つまり、後で自分の主張を展開する機会が用意されている。これらの点で、一発勝負の学会とは異なる。時間的制約が、学会よりは緩やかである。但し、上の理由2で述べた接近戦であることは、共通し

ている。ディベートでの反対尋問でも、接近戦を展開する力が鍛えられる。

議会での質問場面を設定することは、政策論争のトレーニングを可能にする。その対象は、相手の政策である。何を語ったかだけでなく、何をしたか、何をすべきか、何をするつもりか、という政治的行動も対象となる。つまり、言葉だけでなく、行動、意図（意志）をも含む、広範な政治的言動体系全体が問われるのである。たった今行なわれたばかりの口頭発表に限定された学会の質疑応答とは異なる。複雑な政治現象についての学習が必要となる。しかしそれだけに、接近戦に持ち込めるかどうかは、質問者の力量に委ねられる。逃げを許さない強い証拠、それに裏付けられた隙の無い論理の構築が必要である。但し、学会の質問とは異なり、一人の持ち時間は比較的長い。また、ディベートの反対尋問よりも、一つ一つの質問をゆっくり時間をかけて行なうことが出来る。問うだけではなく、自らの意見を展開するだけの時間的余裕がある。

これらの場面と比較することにより、学会での質疑応答場面の特質がより明瞭になる。学生の質問力を鍛えるためには、こうした多様な場面から成るプログラムを用意したい。授業シリーズ「質問を作る」を構想し、質問力を鍛えるカリキュラムを作るのである。

Ⅲ 学生はどんな質問を作ったか

まず、授業で用いた資料「ユニバーサルプレコーション導入における分娩室の清浄度の検討」を示す。

ユニバーサルプレコーション導入における分娩室の清浄度の検討

〈要旨〉

当病院分娩室では面会制限・手指消毒・床消毒・空調の設置に加え、スリッパの履き替えをもって清潔とみなしてきた。しかし分娩室における清潔環境は日本医療福祉設備協会において清浄度Ⅲ（清潔区域）となっている。またユニバーサルプレコーション（以下UPと略す）では、床はすべて不潔とみなしている。このことから、従来の方法での清潔環境のあり方に疑問を感じ、UPに基づいた方法で清浄度Ⅲが保てるか明らかにした。方法としてUP導入前（従来の方法）とUP導入後（スリッパの履き替えなし、分娩時マスク・帽子・足袋の着用、分娩毎の床消毒）における分娩時空中浮遊細菌を採取し、比較検討を行った。その結果、従来の方法でも清浄度Ⅲが保てており、UP導入後は細菌数が有意に減少した。また従来行ってきたスリッパの履き替えは、清浄度Ⅲを保たせるためには必要がなかった。UP導入によるマスク・帽子の着用や分娩毎の床消毒が細菌数減少に効果があったと考える。

I はじめに

分娩室における清潔環境は清浄度Ⅲとなっている。当病院分娩室では面会制限、床消毒、手指消毒、空調の設置に加え、スリッパの履き替えをもって清潔とみなしてきた。

しかしUPでは床はすべて不潔とみなしている。このことから我々は、今まで行ってきたスリッパの履き替え等の必要性に疑問を感じた。そこで我々は、UPに基づいた方法で清浄度Ⅲが立証できれば、疑問が解決できるのではないかと考え、この研究に取り組んだ。

〔中 略〕

2 対象

- 1) UP導入前（スリッパの履き替え、手指消毒、面会制限、業者による1日1回の床消毒、空調）分娩中の空中浮遊細菌採取42例
- 2) UP導入後（スリッパの履き替えなし、手指消毒、面会制限、分娩時介助者のビニールエプロン・マスク・帽子・足袋の着用、業

者による床消毒1日1回、スタッフによる分娩毎の床消毒、空調)
分娩中の空中浮遊細菌採取43例

[中 略]

Ⅶ おわりに

- 1 UP導入後は細菌が減少した。
- 2 スリッパの履き替えをしなくても、細菌数は増加しない。

分娩室は血液や羊水などで汚染される可能性が高い為、これらを分娩室以外に持ち出さないような対策が必要となる。そしてUPを導入したことにより、慣習として行われてきたスリッパの履き替えが無くなり、分娩室の出入りが以前に比べてスムーズになった。

(『平成13年度教育研修 「看護研究の実際と発表」報告書』
社団法人長野県看護協会 p.15～17抜粋)

これに対して、学生は次のような質問を作った。グループごとに話し合い、絞った結果である。

【グループ1】

- ① 従来の方法で清潔が保たれていた要因の中には、スリッパのはきかえの効果もあったのではないか。スリッパのはきかえが必要なかったと断言できる理由は何か？
- ② 従来の方法でも清潔度Ⅲが保たれているのにわざわざ手間とコストがかかるビニールエプロンなどの着用や分娩毎の床消毒を行うということは必要ないと思うのだが、どういう意味があって行うのか。

【グループ2】

- ③ スリッパの履き替えが有効であるのかを検討したかったのならば、スリッパのこと以外は対象の条件を同じにしなければならないのではないか。

- ④ 分娩室を清潔にするための対策を検討しているのに、終わりの部分で、汚染を持ち出さないと、分娩室を不潔区域と考えているのは何故か。

【グループ3】

- ⑤ スリッパの履き替えの必要性に疑問を感じ、必要性を調べたいのであれば、UPの導入前、導入後と他の条件を変えてしまっただけでは、比較にならないのではないか。

【グループ4】

- ⑥ スリッパの履き替えに疑問を感じたのなら今までの方法でスリッパの履き替えについてだけ比較すれば良かったと思うのだが、なぜユニバーサルプレコーションを導入して、違う条件下での比較を行ったのか。

【グループ5】

- ⑦ スリッパの履き替えをしなくても、細菌数は増加しないということや、マスク、帽子の着用や分娩毎の床消毒が細菌数減少に効果があったということは、同じ条件下で比較しなくては言えないのではないか。

【グループ6】

- ⑧ 「UP導入における分娩室の清浄度の検討」とあるが、より清潔にするにはUP導入後もスリッパのはきかえをした方が良いのではないか？ 結局スリッパのはきかえが面倒くさかったのでは？
- ⑨ 出産が立て続けに入ってきてしまったら床の消毒もできず、スリッパも汚染されているし、清潔な状況とは言えないと思われるが、本当に分娩毎の消毒は可能か。

IV 質問のレトリック分析

授業では、①～⑨の質問を逐一分析した。

① 従来の方法で清潔が保たれていた要因の中には、スリッパのはきかえの効果もあったのではないか。スリッパのはきかえが必要なかったと断言できる理由は何か？

相手はすでに、「従来行ってきたスリッパの履き替えは、清浄度Ⅲを保たせるためには必要がなかった。」と主張していた。この主張に対して「従来の方法で清潔が保たれていた要因の中には、スリッパのはきかえの効果もあったのではないか。」と質問してどうするか。

相手は必要なしという。それに対して①は必要ありという。単なる水掛け論である。決め手の無い結論の応酬にすぎない。相手が必要なしと主張しているのに対して、それが違うというのならば、なぜ違うのかを説明する責任は、①の方に生じる。つまり、必要ありという見方が正しいことを立証する責任は、①の側にある。それ抜きに「スリッパのはきかえの効果もあったのではないか。」といわれても、相手は困る。当然、相手は切り返すはずである。「でも、私は実験を通して履き替えの必要が無かったという結論に達したのです。それはすでに発表の中で申しました。それがなぜ間違いなのですか。」①は、それが間違いだという理由を示し説明するために、汗をかかねばならなくなる。自らを損な立場に追い込む羽目に陥る。

こんな羽目に陥らない質問の方法がある。例えば、③「スリッパのこと以外は対象の条件を同じにしなければならないのではないか。」はよい。何故よいか。相手の立証の方法の不備を具体的に突いているからである。相手はスリッパ以外の条件まで変えて比較している。これでは、スリッパ履き替え効果の有無は分からない。出てきた結論ではなく、その立証の正当性で勝負する。水掛

け論を回避することが出来る。

「スリッパのはきかえが必要なかったと断言できる理由は何か？」この質問も切れ味が悪い。「断言できる理由」など聞いてどうするか。相手はUP導入後の細菌数を調査し、スリッパの履き替えなしでも清浄度Ⅲ以上の環境が実現できたという事実を根拠にしているのである。この話を繰り返させるだけである。すでに語られた内容を繰り返させるだけで、数分時間を空費する。場合によっては、相手は、語られた理由以外の理由を、後から付け足すかもしれない。発表の外側で言い訳する余地を相手に与えてしまうことになる。これでは、発表そのものに責任を持つという研究の原則を、却って歪める結果となる。

対立すべきなのは、理由づけの方法である。そこが争点である。質問はそこに的を絞らねばならない。①は真の争点を取り間違えている。

② 従来の方法でも清潔度Ⅲが保たれているのにわざわざ手間とコストがかかるビニールエプロンなどの着用や分娩毎の床消毒を行うということは必要ないと思うのだが、どういう意味があって行うのか。

これでは1文に盛る内容が多すぎる。その結果、構文がひどく複雑になっている。特に、「必要ない」の主部は長く複雑に過ぎる。

何が「必要ない」のか。二つある。一つ目は「ビニールエプロンなどの着用」、二つ目は「分娩毎の床消毒」である。この二つに係る修飾部分がある。「手間とコストがかかる」である。(この二つが「手間とコストがかかる」というのは、②の見方である。この見方が成り立つかどうかについては、説明が要る。修飾部分にしてしまうと、この説明のチャンスが無くなる。「手間とコストがかかる」は、すでに証明済みの、自明の理だということになってしまう。これは、「先決問題要求の虚偽」【*petitio principii*】である。) さらに、「わざわざ」という副詞がある。この副詞は、「行う」に係る。また、冒頭の「従来の方法でも清潔度Ⅲが保たれているのに」も、同じく「行う」に係る。これらすべて

を「ということ」が受けて、主部を構成している。この重さ、この複雑さに比べて、述語は「必要ない」ただ一言である。まことに不釣合である。

これだけ長い主部を受けてやっと一文が終わったと思ったら、文はまだ続く。「と思うのだが、どういう意味があって行うのか。」この部分は、全く無意味である。

まず、「と思うのだが」である。「思う」から書いたのである。思わないことは書けない。ここだけ「思う」と断わる必要も無い。削るべきである。思った内容だけを書け。思った中身を裸で出せ。

次に、「どういう意味があって行うのか。」である。「意味」を聞いてどうなるか。先の①の「理由」と同様、相手に演説を許し、時間稼ぎさせるだけである。相手は例えばこう語るであろう。“「ビニールエプロンなどの着用や分娩毎の床消毒」は、「UPに基づいた方法」の不可欠な構成要素である。「UPに基づいた方法」の有効性を検証しようというのが研究の最大の眼目なのだから、「ビニールエプロンなどの着用や分娩毎の床消毒」を含めるのは当然である。これらを除外すると「UPに基づいた方法」自体が成り立たなくなるではないか。”こんな解説を長々と許してはいけない。

争点は、「ビニールエプロンなどの着用や分娩毎の床消毒」の「意味」ではない。そのデメリットを認識しているか否かである。手間をかけること（スリッパ）を回避しようとして、別の手間をかける結果になる（ビニールエプロン／分娩毎の床消毒）という逆説（paradox）、そしてその逆説に気付かない愚を指摘すればよいのである。構文が長く複雑で、無駄があると、争点がぼける。相手に楽をさせる結果になる。

②は、次のように問うべきであった。

「スリッパ履き替えの手間を省きたくてUPを導入したのではなかったか。ところがビニールエプロンなどの着用や分娩毎の床消毒は、スリッパ履き替え以上に手間がかかる。コストもかかる。これでは従来の方法の方が、まだましではなかったか。」

③ スリッパの履き替えが有効であるのかを検討したかったのならば、スリッパのこと以外は対象の条件を同じにしなければならないのではないか。

かなりよい。細かい問題部分の直しを行う。

「スリッパの履き替えが有効であるのかを」は落ち着かない。「スリッパの履き替えが有効であるか否かを」と直す。「スリッパのこと以外は」を「スリッパ以外は」と無駄を省く。「のこと」は無駄である。

この質問がよいのは、争点を掴んでいるからである。先の①の分析で述べたように、相手の立証の方法の不備を具体的に突いているからである。資料の論文ではスリッパ以外の条件をも変えている。「分娩時介助者のビニールエプロン・マスク・帽子・足袋の着用」「スタッフによる分娩毎の床消毒1日1回」が新たに加えられている。③は、ここに的を絞って攻める。「スリッパのこと以外は対象の条件を同じにしなければならない」という主張を突き付ける。相手に許す答えは、この主張に同意するか否かである。相手をYESかNOかの二者択一に追い込む。

④ 分娩室を清潔にするための対策を検討しているのに、終わりの部分で、汚染を持ち出さないと、分娩室を不潔区域と考えているのは何故か。

「汚染を持ち出さないと、分娩室を不潔区域と考えているのは何故か。」は書けていない。二重の意味で、これでは駄目である。

第1に、「汚染を持ち出さないと」は、実は相手の論の引用なのである。ところがこのままでは、そう理解するにはかなりの努力を要する。引用のスタイルが中途半端に崩れているからである。例えば次のいずれかのように直すべきである。引用であることを明瞭に示すべきなのである。

- i) 「〔汚染を〕持ち出さない」として
- ii) 「これら〔汚染〕を分娩室以外に持ち出さないような対策が必要となる。」と述べて

第2に、相手が「分娩室を不潔区域と考えている」というのは、不正確である。相手は、分娩室が「血液や羊水などで汚染される可能性が高い」と言ったのである。その可能性があることは、④も否定できないだろう。だからこそ、床消毒などをして清浄度を保つ努力が要る。その努力の結果、分娩室の清潔環境が保たれるのである。それは、分娩室を恒常的に「不潔区域」だとみなすこととは違う。「不潔区域」は、相手が使った用語ではない。④が持ち出した用語である。④は、この用語を新たに持ち出して、相手の論を歪めている。

④で問うべきは、次の問いであったはずだ。

「分娩室を清潔にするための対策を検討するのが研究の課題であったはずだ。それなのに、汚染を持ち出さない対策という別の課題をなぜ持ち出すのか。中途半端ではないか。」

これが、④の前半部分「分娩室を清潔にするための対策を検討しているのに、終わりの部分で、」が示唆する真の問いである。これ以外、前半部分を生かす問いは想定できない。

⑤ スリッパの履き替えの必要性に疑問を感じ、必要性を調べたいのであれば、UPの導入前、導入後と他の条件を変えてしまえば、比較にならないのではないか。

「スリッパの履き替えの必要性に疑問を感じ、必要性を調べたいのであれば、」は、次にはつながらない。「スリッパの履き替えの必要性に疑問を感じ、必要性を調べたいのに、」でなければならない。もしくは、次のように、一旦正しい方法を示してから、それと相手の実際の方法とを比べればよい。「スリッパの履き替えの必要性に疑問を感じ、必要性を調べたいのであれば、その履き替

えの有無だけを変えるべきである。それ以外の条件は変えてはいけない。それなのに、UPの導入前、導入後と他の条件を変えてしまっている。これでは、比較にならないのではないか。」

⑤には、1文にすべて納めてしまおうという無理がある。だから、省略し過ぎて文意を乱す。省略部分を埋める努力を相手に強いる結果となる。

⑥ スリッパの履き替えに疑問を感じたのなら今までの方法でスリッパの履き替えについてだけ比較すれば良かったと思うのだが、なぜユニバーサルプレコーションを導入して、違う条件下での比較を行ったのか。

「と思うのだが、」はやめよう。文は短い方がよい。長くなればなるほど情報量が増える。情報量が増えると、記憶しておくだけでもエネルギーを使う。争点がどこかが見えにくくもなる。接続助詞「が」で続けなければならない必要性は無い。また、「思う」も無意味である。その理由はすでに、②の分析において述べた。

「スリッパの履き替えに疑問を感じたのなら、今までの方法でスリッパの履き替えについてだけ比較すれば良かったのではないか。」これでよい。ここまですべて1文独立させればよいのである。ここまですべて、相手に考えさせる余裕を与えるべきである。相手に発言する番を投げ返すべきなのである。記憶のためのエネルギー消費を最小限にして、答えを考えるためにこそエネルギーを確保するのである。

後半の「なぜユニバーサルプレコーションを導入して、違う条件下での比較を行ったのか。」は、初めの質問の言い換えである。初めの質問を、別の角度で言い換えたものである。言い換えなのだから、「なぜ……か。」はやめる。初めの質問とできるだけ同じ構文を使う。例えば、「ユニバーサルプレコーションを導入して、違う条件下での比較を行う必要は無かったのではないか。」の方がよい。

⑦ スリッパの履き替えをしなくても、細菌数は増加しないということや、マスク、帽子の着用や分娩毎の床消毒が細菌数減少に効果があったということは、同じ条件下で比較しなくては言えないのではないか。

何が「同じ条件下で比較しなくては言えないのではないか。」と問うのか。二つある。a「スリッパの履き替えをしなくても、細菌数は増加しないということ」、b「マスク、帽子の着用や分娩毎の床消毒が細菌数減少に効果があったということ」である。a b二つをいっぺんに問うている。これでは中途半端にしか答えてもらえなくなる恐れがある。答えの可能性は、4通りある。「a b共に言える」「a b共に言えない」「aは言えるがbは言えない」「aは言えないがbは言える」である。ところが、いっぺんに問うと、「aは言える」(bは不明)や「bは言える」(aは不明)などと答えておしまいになるかも知れないのだ。

問いは一つに絞るべきである。複数の問いをすべて、一文に突っ込んではいけない。一文、一文、問いを書き分けるべきである。一文一問主義の原則である。次のように書き分ける。

「スリッパの履き替えをしなくても、細菌数は増加しないということは、同じ条件下で比較しなくては言えないのではないか。また、マスク、帽子の着用や分娩毎の床消毒が細菌数減少に効果があったということは、どうか。これも、同じ条件下で比較しなくては言えないのではないか。」

⑧ 「UP導入における分娩室の清浄度の検討」とあるが、より清潔にするにはUP導入後もスリッパのはきかえをした方が良いのではないか？
結局スリッパのはきかえが面倒くさかったのでは？

引用のカギ括弧が使われている。これはよい。相手の論を引用してから、そ

れについて問う——質問の定石である。

しかし、この質問の真の争点は何か。不明である。皮肉はある。しかし、批判は成立していない。だから、相手は困らない。

「より清潔にするにはUP導入後もスリッパのはきかえをした方が良いのではないか？」⑧自身はどう考えているのか。「より清潔にするには」と、真面目に考えているのか。つまり、清浄度をどこまでも高める方向に賛成なのか。過度に消毒剤を使うと、却って環境を汚染したり耐性菌を出現させたりする恐れがある。また、限りなく無菌状態を追求すると、抵抗力を損なう恐れもある。必要十分な清浄度を確保するに留めるべきなのである。

⑧自身もそう思うという。だから、この質問は、相手を困らせるつもりで作ったという。“こう問われれば、必要十分な清浄度を確保するに留めるという方向とは逆行する。当然、相手は困惑するだろう。”しかし、この読みは、相手が⑧と同じ方向を前提としている場合に限って成り立つにすぎない。相手が素直に「それはそうですね。より清潔にするにはUP導入後もスリッパのはきかえをした方が良いですね。」などと答えたならば、⑧はどうするつもりか。話は振り出しに戻ってしまうことになる。

また、「結局スリッパのはきかえが面倒くさかったのでは？」は、勘ぐり論法である。相手はいう。「UPでは床はすべて不潔とみなしている。このことから我々は、今まで行ってきたスリッパの履き替え等の必要性に疑問を感じた。」これが相手の動機の説明である。この語られた理由以外の腹の内を推測しても、その正しさを証明できるか。何を証拠に証明できるのか。できるわけがない。

さらに、「面倒くさい」は、否定的な意味を帯びた言葉である。「スリッパの履き替えは面倒くさい」と、「スリッパを履き替えると出入りがスムーズにいかない」とを比較すれば、分かる。「面倒くさい」は、嫌がっている心情に裏打ちされている。つまり、嫌悪という喚情的機能を持つ用語である。⑧は、この喚情的機能に依存するだけである。相手が「そうですね。勿論、面倒ですよ。なるべく面倒ではない方法をとった方がいいではありませんか。」などと答え

たならば、おしまいである。

- ⑨ 出産が立て続けに入ってきてしまったら床の消毒もできず、スリッパも汚染されているし、清潔な状況とは言えないと思われるが、本当に分娩毎の消毒は可能か。

曲がりくねった文である。次のように配列を替えよう。

「本当に分娩毎の消毒は可能か。出産が立て続けに入ってきてしまったら、分娩毎の消毒など出来なくなるのではないか。そうなれば、スリッパも汚染される。これでは清潔な状況を維持できなくなりほしくないか。」

まず、相手のいう「分娩毎の消毒」に一般的疑問を呈する。次の「出産が立て続けに入ってきてしまったら、分娩毎の消毒など出来なくなるのではないか。」で、より具体的な事態を例にして、その疑問を問い直す。「そうなれば」以下は、その結果である。こうして一文ごとの仕事を明確にする。仕事が異なれば、文も分ける。いくつもの文に書き分けることで、相手の理解のスピードに合わせる事が出来る。ゆっくりと相手に合わせて書く。その呼吸を学ぶべきである。